郷土に宿る物語 武蔵 MUSASHI伝説

武蔵の木刀が振り下ろされ、小次郎による燕返しの長刀が空を切った…。60数回の勝負で1度も負けたことが無かったという剣聖・宮本武蔵。なかでも佐々木小次郎との「巌流島の決闘」は後世に伝えられ、あまりにも有名です。しかし、その武蔵の伝説が福智町にも残されていることをみなさんはご存じでしょうか。地元・神崎で「宮本寺」や「宮本様」とよばれてきた常立寺にまつわる言い伝え、「武蔵が武芸の指南や修行をしていた」という伝承を確証へと導いたのが福田昌氏（金田）です。今から13年前、一枚の棟札と風化寸前の墓石から、絡み合った歴史の糸はほどかれました。歴史上の人物にスポットがあてられ、その物語に多くの興味が寄せられる今、観光パンフレットには載らない、深い部分のお話しを福田昌さんにご案内いただきます。

【巌流島の決闘】 慶長年間に小倉細川藩の公認で行われた巌流島（山口県下関市舟島）での決闘。宮本武蔵と佐々木小次郎が勝負し、武蔵が勝利した。小次郎の出生には諸説あるが、現在最も注目されているのが「岩石城（添田町）出身説」。彦山修験（山伏）の勢力を背景に影響力を強めた佐々木氏は、藩にとって目障りな存在になったと推察されている。「沼田家記」は、決闘後まだ息のあった小次郎が撲殺されたと記している。なお、この決闘後、武蔵は真剣試合を行わなくなり、詳細を一切語らなかったという。また、小次郎は岩石城の名にちなんで、岩（巌）流を創始したともいわれている。（右の写真は添田町の岩石城）

伝説の謎をひもとく 棟札と墓碑で明らかに

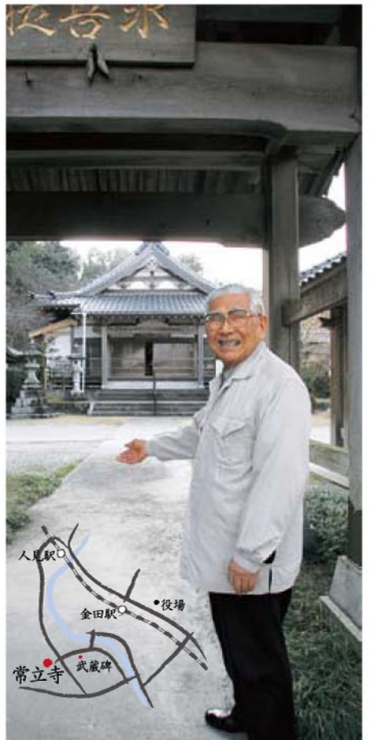
東方に香春岳、正面に福智連峰を望み、眼下に彦山川、中元寺川、泌川の合流点を見下ろす円大山常立寺（神崎）。古くは真言宗要性寺と呼ばれ、大山吉久という人が、承応3年（1654）に寺院を新築し、日蓮宗に改めたのが始まりと伝えられています。この大山吉久という人物については「宮本武蔵の弟子」だとか「常立寺の境内で武蔵と武術の稽古をしていた」という伝説があるだけで、その多くが謎のままでした。

ところが、平成8年に行われた金田町誌の編さんで、謎のベールが解けていったのです。常立寺の早瀬随禮住職から「昭和55年の本堂改築で見つかった古い棟札が出てきた」という連絡を受け、早速その棟札を手にした福田昌氏は自らの目を疑いました。

早瀬 随禮 円大山常立寺 住職

福田 昌 福智町文化財専門委員

それはまさしく大山吉久が創建した寺であり、宮本武蔵とその子・宮本伊織との重大な関係を示すものだったのです。

さらに、この常立寺には香春岳城の戦いで城攻めに参戦し、討死した小原信利の墓と伝わる墓碑がありました。しかし約4百年も昔に立てられた碑は表面が風化し、肉眼で文字が読める状態ではありませんでした。棟札の発見以来、再三にわたって常立寺を訪問していた福田昌さんは「日の光の角度によって『母』という字がみえる。小原信利の墓ではないのでは」という住職の問いに共感し、平成8年5月に墓碑の拓本採取に成功。その碑文が武蔵伝説とのつながりを浮き彫りにしたのです。碑文には「祖父信利」「祖母 常光院」とあることから、この墓を建立したのは、小原信利の孫である大山吉久、宮本伊織、小原貞隆、田原正久らの兄弟であることがわかりました。彼らにとって小原信利と常光院は母方の祖父母であり、母・理応院は宮本武蔵の実兄・田原久光の妻。つまり武蔵は、彼ら4兄弟の叔父にあたる存在だったのです。

- 田原 家貞
  - 田原 久光
    - 宮本 武蔵
      - 大山 吉久　大山右金吾吉久と名乗る。常立寺を建立
      - 宮本 伊織　武蔵の養子となる。小倉小笠原藩筆頭家老
    - 理応院　常立寺に孫が墓碑建立
      - 小原 貞隆　母方の小原家を継ぎ医師となる
      - 田原 正久　田原家を継ぎ地元播州で商家となる
  - 小原 信利　香春岳城の戦いで討死
    - 常光院